



“共に生きる”とらららら

榊田 正子

幼稚園で

このところ、園児のお母さんたちと話をしている時に、「十七、八歳になった時にキレない子どもにするには、どうしたらいいですか」という質問を受けることがよくある。子どもの発達に関することや親子関係その他色々な内容を含むかなり大きな問題であると思われるが、いとも簡単に、まるで何かのQ&Aのような雰囲気で問われることも少くない。

十代の少年たちが関与する痛ましい事件が次々と起こり、それらについて様々な立場の人が色々なことを述べ、あふれるほどの情報が目からも耳からも入ってくる昨今であるから、若いお母さんたちの不安はわからないわけではない。私として教育の現場に身を置く者として、このような社会の現況を重くま

たいたたまれない思いで受けとめざるを得ない日々である。

しかしながらと言うべきか、だからこそと言うべきか、先のような問いの中に時として、「こういう場合にはこういうやり方をすれば……」というように子どもの育ちを操作の対象のように見る見方や、あるいは特効薬を予防接種して安心を確保しようとするようなニュアンスが見え隠れすることがあり、そんな時には思わず「ちょっと待って」と質問を制することになってしまふ。というのも、あらゆる体験の中で育ちつつある子どもを目前にしているお母さんたちであるからこそ、日々の生活を子どもと向き合って共に生きる中で、新たに見えてくるもの、生まれてくるものに心を留め、それらを積み重ね考えていくような子育ての姿勢にもっと目を向けてほしいと願うからである。

だがそう願いながらも、こういうことをどうしたらお母さんたちにわかってもらえるのか……これが思いの外難しくして——折にふれ言葉では伝えてみるのだが表現の拙さもあり



——頭を抱えてしまうのもまた現実なのである。

保育の場において、保育実践に生気を与え、それを意義あるものとしていくための大きな要素が、一人一人の子どもとしっかり向き合って共に生活を創り生きていくこうとする保育者の姿勢であろうと考えている。教師としての、またその幼稚園としての教育理念を基盤に持ちながら、目の前にいる子どもと状況を共有し、子どもの思いに寄り添いつつそこに教師の専門性を生かし、自らの主体性をもってかかわることを通して子どもの育ちを支えようとする姿勢である。

現実には、保育の場の状況は様々で予想がつくことではないし、常に物事の一部始終が見えているわけでもなく、また、子どもの表面に現れた行動ばかりが目立って、その内面で何を体験しているのか、何を求めているのか伝わってこないことも多い。しかし、保育者はいつでも具体的方策をあらかじめ携えて個々の状況に臨まねばならない、ということではなく、保育者としての専門性をもって子どもと向きあったその関係の中に生まれるものに、もっと配慮したいと思うのである。このことは、理念のない行き当たりばつたりの保育というものでは決してない。

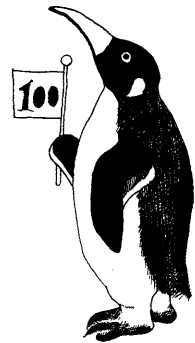
こうして関係の中で生活を組み立て、新たな状況へ向かっていく営みを、この稿で私は、「共に生きる」と表現したのである。

旅先で

前述のような問題意識を持ちつつ今年の夏、アフリカのカメルーンでボランティアとして働いている夫を訪ねた。私にとってこの国は、三年前の夏に続いて二度目の訪問である。

資源や産業が乏しく現金収入が殆ど無いために、町から少し離れると電気も水道も引けない家が多いという。この貧しい国の人々の生活の様子は、三年前と殆ど変わっていないように見えた。パソコンにしても携帯電話にしても、あつという間に国中に普及する我が国の事情とは大ちがいである。前回の訪問では、初めてということもあつてこの国の人々の生活の様子が興味深く残るものだったが、今回の印象は、全くちがうところにあつた。経済状況にしても生活様式にしても数年間の単位では全くといってよいほど変化のない状況にいる人間と、我が国のように変化のめまぐるしい状況にいる人間が、この地球環境を共有して同時にそれぞれ生きているという現実が、今回は実感として私の心を強く捉えたのである。

そして、夫と同様にボランティアとしてこの国に来て働いている人たちの話や活動の様子にも、頷けるものがあつた。彼らは途上国を援助するにあたって多くの技術や知識やプ



ログラムを持つている人たちであるから、当初はそれらを生かして効果的な活動を考えていたようである。しかし実際にこの国の状況の中で活動を始めてみると、様々なズレや壁にぶつかり、悩み苦しみながら見出した道が、この国の人と一緒に働くことを通して充分に彼らの思いを聴き、そこに自らが差し出せるものを考え、実現できることから進めていくやり方、すなわち「共に生きることを通して拓いてゆく」という道だったようである。

そこには当初の計画を大幅に遅らせなければならなかったり、方向変更を余儀なくされることも少なからずあったかもしれないが、それらは挫折というよりは、そこで本当に必要なもの、意味あるものへの創造の過程といえるような気がした。

また象徴的な体験もした。たまたま道で出逢った青年と歩きながら話をした時のことである。その青年が、自分の国はとにかく貧しい、学校に行くためのお金もなければ病院に行くお金もない、としきりに訴えるので、同行した友人が「お金がなくても心の豊かさがあるのではないか」と言ったところ、青年は全く理解に苦しむといった表情を見せたのである。友人も、言ってしまった後でその表現がその場には合わないおさまりの悪さを感じたようである。「お金がない」「貧しい」という言葉の後ろにある彼らの切実な叫びと、物にあふれる日本で心の荒みを痛感する我々が言わんとする意味とは、行きずりの会話などでは伝わりようもない隔たりがあるのであろう。そういうことこそ、「共に生きる」体験を通して互いに伝わり、そこに全く新しい何か——それが視点なのか発想なのかあるいは

生き方なのか全く想像はつかないが——が生まれる可能性があるのでないかと思われた。

再び保育の場で

様々な体験を経て、“共に生きる”ということは私の中でさらに幅広い問題意識となっている。幼稚園においては、保育者と子どもとの関係のみならず、保育者同志の連携的關係にこの視点を取り込むことも、より充実した実践への可能性を開くものとなろう。また、家庭における親子の關係は初めに触れたところであるが、これについては理屈の理解ではなく、子育てのよろこびを体験することが目指す方向になるのであろう。このテーマをお母さんたちと共に考えていくことが、継続しつづある私の課題である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

